

『就実論叢』第46号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2017年2月28日 発行

# 幼稚園の弁当場面における保育者の食事過程 —子どもとのかかわりに着目して—

**The process of a teacher's eating behavior during lunch time at the kindergarten  
: Focused on a teacher and children's interactions**

伊 藤 優

# 幼稚園の弁当場面における保育者の食事過程

## —子どもとのかかわりに着目して—

The process of a teacher's eating behavior during lunch time at the kindergarten

: Focused on a teacher and children's interactions

伊藤 優 (幼児教育学科)

ITO Yu

キーワード：幼稚園、弁当場面、食事、かかわり

### 1. はじめに

平成17年に食育基本法が公布されて以降、「食育」の重要性について、多くの指摘がなされている(足立, 2000; 室田, 2003)。特に、幼児期は生涯に渡って行う食事に関する知識や技能の基礎を培う重要な時期である。そのため、家庭だけでなく、保育施設においても「食育」活動が積極的に行われている。

幼児期の「食育」に関して、古郡・菊地(2009)は、保育施設で楽しく食事をしたという経験が大人になっての食事の楽しさと関係していることを明らかにしている。また、学生に対して保育所・幼稚園における食事場面に関する思い出調査を行った上羽・古郡(2007)は、保育者の気遣いがうれしかった思い出として印象に残っていることを報告している。さらに、多くの保育者が、食事場면을「食育」の場として重要視していること(逸見・焰硝岩・春名・大西, 2011)から、保育施設の食事場面が幼児期の子どもに与える影響の大きさだけでなく、保育者自身も食事場면을重要な「食育」の場として意識しているといえる。以上のことから、食事場面での保育者と子どもとの関わりを詳細に検討することが、幼児期の「食育」を考える上で重要な示唆をもたらすと考えられる。

このような保育施設の食事場面における保育者と子どものかかわりを検討したものは多く存在する(中澤・鍛治・石井, 1995; 今村, 2008; Wardle, Herrera, Cooke, & Gibson, 2003)。しかし、伊藤(2013)が指摘するように、その多くは、保育者の働きかけに焦点を当て、「教える」、「供給する」という一方向的な観点から検討を行っている。保育施設の食事場面では、多くの場合、保育者と子どもと一緒に食事を行う。つまり、食事場面は保育者と子どもが共に食べ物を食べ、双方がコミュニケーションをとれる場である。保育者はマナーなどを「教える」存在や、食事を「供給する」存在に留まらない。子どもと同じ食事の主体者の側面も持っている。しかし、保育者と子どものかかわりを扱った先行研究では、保育者を教育者の視点のみで捉えており、保育者を子どもと同じ食事の主体者として捉えていな

い。

保育施設の食事場面は集団で食べることが基本であり、教育的な場という意味を超えて、保育者が子どもに与える影響は大きい。そこで、今後は共に食事の主体者である保育者と子どもが保育施設の食事場面においてどのようにかかわりながら食べているのかを明らかにすることを通して、保育施設で保育者と子どもが一緒に食べることの意味や保育者の役割を見出す必要があるだろう。これらを明らかにすることで、教育的な場に留まらない、集団食事場面の新たな側面を示すことができるのではないかと考えられる。

以上のことから本研究では、保育者が昼食場面において子どもとかかわりながら、どのように食事をしているのかについて検討することによって、子どもや同僚保育者などの他者の存在や幼稚園の昼食場面特有のルールやマナーが保育者の行動にどのように影響を与えているのか明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では幼稚園の弁当場面を観察対象とする。弁当は給食のような配膳がない。そのため、給食場面に比べ幼稚園の弁当場面は、保育者が子どもたちと同じ時間と空間を共有する中で、子どもたちのグループに入り、子どもと同じように弁当を食べたり、コミュニケーションをとったりすることができる。弁当場面において、保育者は子どもと集団で食事を行う食事の主体者としての側面と、マナーやルールを教える役割を併せ持っており、このような保育者と子どものかかわりが給食場面より顕著にみられると推察されることから、本研究では幼稚園の弁当場面を観察対象とする。

## 2. 調査方法

### (1) 観察対象

F 幼稚園年中クラスの担任保育者 H を観察対象とする。対象幼稚園の年中クラスの子どもは全 27 名であり（観察日 2 名欠席）、担任保育者 H は副担任保育者 M とともに子どもとかかわっている。観察対象園の弁当場面では、一つの机を 5・6 名で囲み、向かい合って食べる食事形態であり、子どもや保育者は好きなどころで食べることができる（Figure 1）。

観察後に行うインフォーマルな担任保育者 H へのインタビューから、保育者 H は、子どもが自分で自分の考えていることを言えるようになることを対象クラスの子どもの課題として捉えていた。また、弁当場面においては、楽しく食べることを重視しており、食べる場所を変えるなど環境づくりにも配慮していると述べていた。

研究対象を年中クラスにした理由として、4 歳児は仲間とのつながりが強くなる一方でけんかも増えてくる時期であること、決まりの大切さに気づいたり、周りの友達の気持ちなどを考え自分の行動を抑制できるようになるといった発達的特徴がみられる点を踏まえている（厚生労働省、2008）。集団で食べる弁当場面は友達とのコミュニケーションの場であるとともにマナーやルールなどの制約が存在する場でもある。そのため、上記のような発達的特徴を示す年齢集団である年中クラスの弁当場面において、保育者は子どもと楽しく食べながら

もマナーやルールなどにも言及したかかわりも行わなくてはならず、保育者の多様な弁当場面での行為がみられるのではないかと考えられる。また、実際に予備観察でも年少児クラスや年長児クラスと比べ、年中児クラスでの弁当場面における保育者と子どもとのかかわりが顕著にみられたため、年中児クラスを観察対象とした。

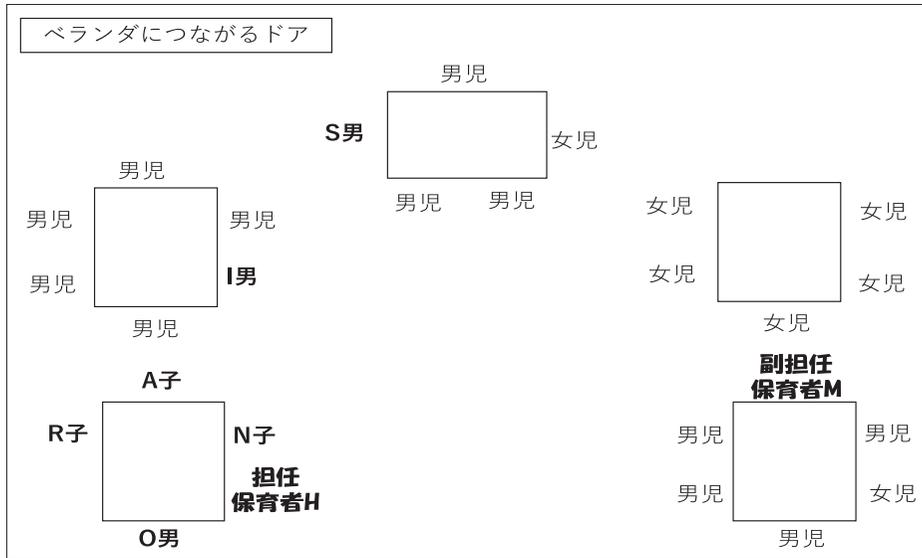


Figure1 観察日の席の配置

### (2) 観察期間及び観察の手続き

観察日は2013年10月24日であった。観察時間は、保育者と子どもがみんなで「いただきます」をしてから、保育者が弁当を片づけるまでの間とした（11：57～12：35）。観察方法は幼稚園の弁当場面において、対象となる保育者と子どもとのかかわりをビデオカメラにより撮影した。

### (3) 分析の方法

対象場面の映像記録から、保育者の行為や発言を抽出し、動きのまとまりごとに区切ってテキスト化した。行為や発言は、「自分の弁当を持ってくる」「子どもたち全体を見渡す」など、なるべく細かな切片にした。そして、保育者Hの言動及び保育者Hとかかわった他者の言動を抽出し、時間軸に沿って記述した（保育者の言動レベル：47個、保育者Hにかかわる他者の言動ラベル：18個）。ラベルには、それに関与している幼児の名前も記した。

これらを保育者の言動やその変遷、周囲から受けた影響などについて、TEM（Trajectory Equifinality Model：複線径路・等至性モデル；サトウ編，2009）を用いて分析した。TEMは、対象の具体的な経験や変容のプロセスを、時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする方法論である（安田・サトウ，2012）。そのため、弁当場面における

保育者の行為のプロセスを子どもとのかかわりを含めて丁寧に描き出す上で有効といえる。具体的には、作成されたラベルを、出来事の時系列に即して左から右へと配列することで、食事時間内での保育者Hの言動のプロセスを描出した。また、保育者Hにかかわる他者の言動も合わせて分析することで、保育者Hの言動の変容及び維持要因を明示することを試みた。描出作業の際は、保育者の位置（食べている机と食べている机以外）も明示化できるように、矢印やラベルの高低により保育者の移動を表した。そして、Table1に示すTEMの理論を構成する基本概念（サトウ, 2009; 安田・サトウ, 2012; 荒川・安田・サトウ, 2012）を用いてさらに分析し、保育者の食事に関わる行動の転換点や影響要因などを探った。

Table1 TEM理論を構成する基本概念の説明及び本研究での主な位置づけ

基本概念	概念の意味	本研究での主な位置づけ
等至点 (EFP; Equifinality Point)	ある定常状態に等しく辿りつくポイント	本研究では、「自分の弁当を完食する」ことを食べ終わりとした。
両極化した等至点 (P-EFP; Polarized Equifinality Point)	等至点を一つのものとして考えるのではなく、それと対になるようないわば補集合的な事象	本研究では、保育者が完食することを等至点とした。そのため、両極化した等至点(P-EFP)は「弁当を残す」とした。
分岐点 (BFP; Bifurcation Point)	径路が発生・分岐するポイントであり、ある経験において、実現可能な複数の径路が用意されている状態や複数径路を可能にする結節点	保育者の行動の転換点、分かれ目
必須通過点 (OPP; Obligatory Passage Point)	ある地点からある地点に移動するために、ほぼ必然的に通らなければいけない地点	保育者が弁当を食べる上で必然的に生じる出来事
社会的方向付け (SD; Social Direction)	等至点から遠ざけるように働く力	保育者の食べる行為を制限する周囲からの影響
社会的ガイド (SG; Social Guidance)	等至点に近づけるように働く力	保育者の食べる行為を促進する周囲からの影響

### 3. 結果及び考察

保育者Hが「いただきます」をしてから弁当を片づけるまでの行為の変遷は、Figure 2のように示された。なお、図中のSGは保育者が食べる行為を促進する要因、SDは反対に食べる行為を阻害する要因を意味する。

#### (1) 時期別に見た保育者Hの行為の変遷

弁当場面での保育者Hの行為は、大きく【全体に対するかかわり期】【一緒に食べている子どもとのかかわり期】【遊ぶ子どもと食べている子ども両方へのかかわり期】に分けられた。

【全体に対するかかわり期】は、みんなで「いただきます」をしてから保育者Hが席に座るまでの間を指し、その間保育者は食べず、子どもが食べているか、正しい持ち方で箸を使っているかなど子どもの食べている様子を確認するために歩き回っていた。このように、【全

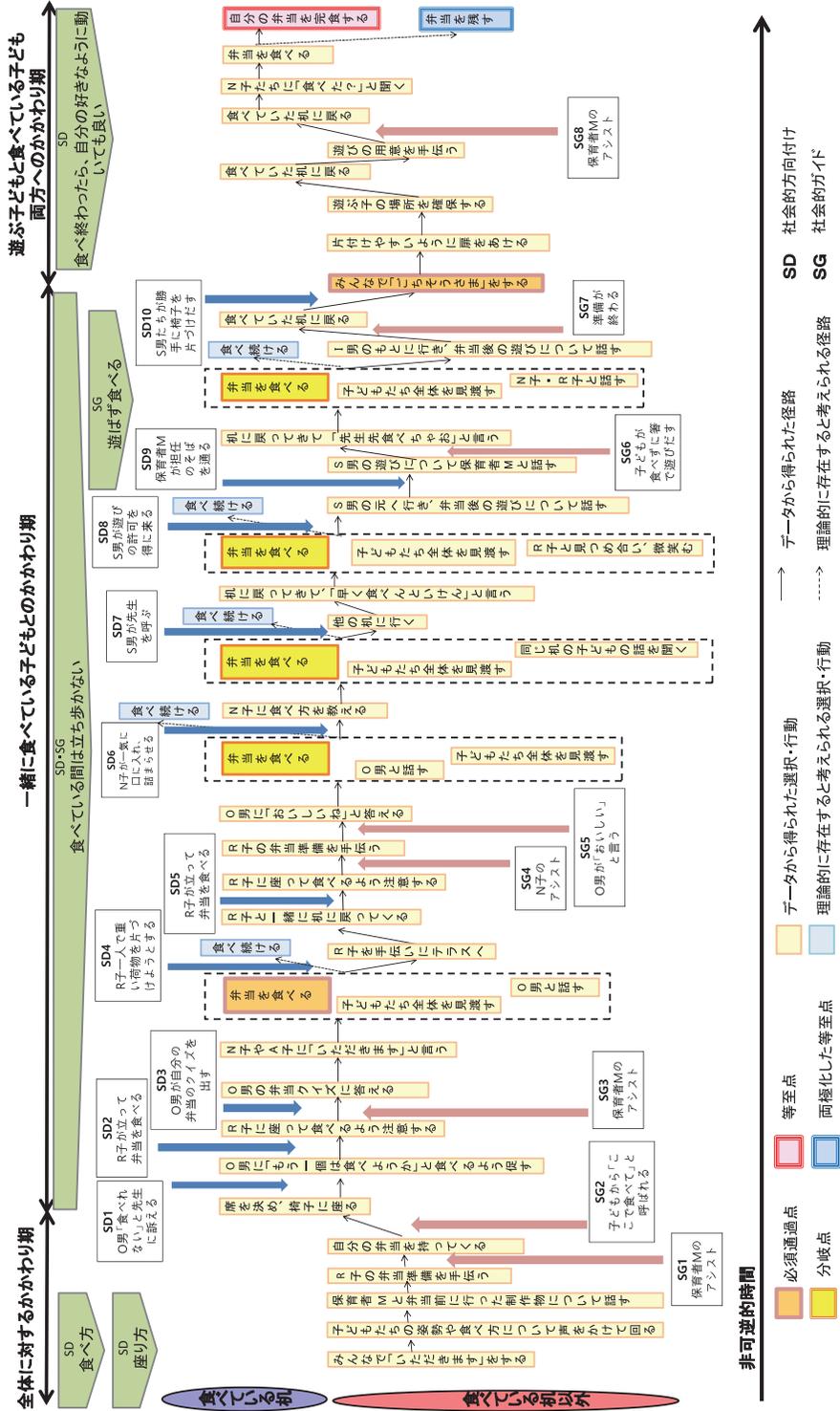


Figure 2. 幼稚園の弁当場面における保育者Hの食べる行為の変遷

体に対するかかわり期】において、主として保育者 H は食事指導に特化しており、食事の指導者としての保育者の側面が強く表れていた。保育者 H は子どもたちに「立ち歩いてはいけない」というルールを何度も子どもたちに提示している。そして、このルールは保育者 H 自身にも当てはまる。そのため、保育者 H は実際に自分が食べ始める前までに、子どもを食事に向かわせ、できるだけ自分が立ち歩いて指導しなくても良いよう食事指導に特化したかかわりを子どもたちに行っていたのではないかと考えられる。

次に、保育者 H が席に着いてから「ごちそうさま」をするまでの間を【一緒に食べている子どもとのかかわり期】とした。この期間の特徴として、保育者 H は多くの時間子どもと共に食べている。しかし、保育者 H はただ食べているだけでなく、「食べる」行為と同時に、子どもたちの会話を聞いたり、話したり、クラスの状況を見たりしている。【全体に対するかかわり期】では、全体への食事指導が主であったのに対し、【一緒に食べている子どもとのかかわり期】では、同じ机で食べている子どもと話したり見つめ合ったりしながら一緒に食べている。一方で、同じ机で食べている子どもとかかわっているものの、クラスの状況を見ながら食べるなど、保育者 H 自身立ち歩いて子どもにかかわりに行くことはないものの、クラス全体の子どもの動きをよくみていた。

また、この時期は「食べる」こととは別の行為を行う際、多くの場合子どもからのアプローチ (SD) によって食べる行為を中断している。つまり、保育者 H は自分から「食べる」ことと別の行為を行うことは少なかった。

【遊ぶ子どもと食べている子ども両方へのかかわり期】は、「ごちそうさま」をしてから保育者 H が弁当を片づけるまでの期間を指す。【遊ぶ子どもと食べている子ども両方へのかかわり期】では、弁当を食べ終わり遊びに移行した子どもとまだ弁当を食べ終わっていない子どもが混在している。そのため、保育者 H は自身の弁当を食べるのはもちろん、遊んでいる子どもと食べている子どもの両方に配慮してかかわっている。つまり、【一緒に食べている子どもとのかかわり期】では子どもからのかかわりによって保育者の「食べる」行為が中断されることが多かったが、【遊ぶ子どもと食べている子ども両方へのかかわり期】では遊んでいる子どもに対して、保育者の方から「食べる」行為を中断し、遊びの用意を手伝ったり、遊びの場所を確保したりしていた。このことから、「いただきます」後は食事場面から遊び場面への移り変わりとともに、保育者の意識も「食べる」ことから遊びに意識が向いているのではないかと考えられる。また、「ごちそうさま」を契機に、食べ終わった子どもたちは遊びに移行する。そのため、まだ食べ終わっていない保育者 H が立ち歩いてもあまり目立たないことから、保育者 H は積極的に立ち歩き、遊びを支援するよう動いているのではないかと考える。

## (2) 食事場面における保育者の行為の特徴

保育者 H は「食べる」行為を中断し、戻ってくる際、一緒に食べている子どもたちに、「おいしいね」や「早く食べるといけん」のように、一言言ってから食べ始めている。これは、

子どもたちと一緒に食べる共食者としての側面を強調した声かけとも考えられ、実際にこのように伝えることが子どもたちとの会話のきっかけになる場合も多かった。このような一言によって、保育者 H は食事が楽しい場になるよう、工夫しているのではないかと推察される。

さらに、保育者 H が自身の弁当を食べるためには、保育者 M のアシストが効果的に機能していた。これは SG の多さからいえるだろう。つまり、保育者 M の行為が保育者 H の食事時間を確保することに重要な役割を担っていたといえる。保育施設の食事場面の多くは数人の保育者で子どもにかかわっており、その中で連携が必要となる。同じ時間内に一緒に食べているからこそ、お互いどちらがいつ食べ、どのように子どもとかわるのかバランスを取っているのではないかと考えられる。

加えて、多くの場合子どもの遊び食べなどは SD として働き、保育者 H の「食べる」行為を中断する子どもの行為であった。しかし、子どもの遊び食べが SG として、保育者の意識を食事に戻すこともあった。つまり、子どもの行為が保育者 H を「食べる」行為から遠ざけることもあれば、引き戻すきっかけを作ることもあり、両方の役割を有していることが示された。

#### 4. まとめ

本研究では、子どもと集団で食事を行う食事の主体者としての側面とマナーやルールを教える役割を併せ持つ保育者が、弁当場面で子どもとかわりながら、どのように食べているのかについて検討した。その結果、保育者は「いただきます」や「ごちそうさま」などの定型化された言葉の前後で働きかけを変化させていた。つまり、保育者にとって、「いただきます」や「ごちそうさま」は、ただのあいさつではなく、自身の行動を変化させる要因となりうるものであるといえる。そして、「立ち歩いてはいけない」や「遊ばず食べる」という幼稚園の弁当場面に浸透しているルールやマナーが保育者の言動に強い影響を与えていることが示された。今後は、事例を増やすとともに、普段の弁当場面とは異なる昼食場面（外で食べる、誕生日パーティーなど）での保育者の行為を検討することで、幼稚園や保育所の日常の食事場面に隠れた暗黙的なルールが保育者に与える影響を明示化していきたい。

#### 謝辞

本研究の観察に快くご協力くださいました幼稚園の担任保育者、副担任保育者をはじめとする教職員の皆様、子どもたちに心よりお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 足立己幸 (2000) 知っていますか 子どもたちの食卓—食生活からからだと心がみえる—  
(NHK スペシャル). 日本放送出版協会
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一

- 例. 立命館人間科学研究. 25, 95-107
- 古郡曜子・菊地和美 (2009) 保育所・幼稚園における食の思い出調査—家庭でのしつけとの関連をふまえて—. 日本調理科学会誌. 42 (6), 410-416
- 今村光章 (2008) 給食時における幼稚園教諭の発話分析—幼児期における「既存型」の食育の枠組みの解明を目指して—. 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究. 10, 125-134
- 伊藤優 (2013) 幼児の集団食事場面にに関する研究の動向. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域. 62, 143-150
- 逸見真理子・焰硝岩政樹・春名かをり・大西孝司 (2011) 保育所における食育の実態と連携のあり方. ノートルダム清心女子大学紀要. 35 (1), 91-103
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. フレーベル館
- 室田洋子 (2003) 心を癒す食卓—子どものサインをどう受け止めるか—. 芽ばえ社
- 中澤潤・鍛冶礼子・石井恭子 (1995) 幼稚園教師の食事場面における援助の分析—子どもの発達と教師の保育観—. 保育学研究. 33 (1), 59-67
- サトウタツヤ (編著) (2009) TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして—. 誠信書房
- 上羽緑・古郡曜子 (2007) 本学学生の幼稚園・保育所における食の思い出調査. 北海道文教大学研究紀要. 31, 85-92
- Wardle, J., Herrera, M. L., Cooke, L. & Gibson, E. L. (2003). Modifying children's food preferences : the effects of exposure and reward on acceptance of an unfamiliar vegetable. *European Journal of Clinical Nutrition*. 57 (2), 341-348
- 安田裕子・サトウタツヤ (編著) (2012) TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開—. 誠信書房